

イギリスの文学

概説と演習

斎藤 勇 監修

畠中 康男・小宮山 博 著

THE SIGN OF  A GOOD BOOK

英 宝 社

まえがき

イギリス文学を概説したり、その歴史を辿った本は、世にいう「汗牛充棟」の例えどおり、これまでもずいぶん多く著わされ、出版されていて、いまさらその屋上屋を架するのはいかがかと思われる。しかし、文学史を編むという仕事は、けっして定規で線を引くような決まり切ったものではない。本書は「読み物」としてよりも、「概説・演習の教材」として編んだ、—いわば音楽の演奏家が楽譜を自由に解釈し、演奏の妙味を出すように、イギリス文学の概論や文学史講義において、教授者が豊富な学識を基に、本書に記した時代背景や作家の概説と主要作品の引用をそれぞれの裁量によって自在に活用し、より効果的で充実した講義を行なっていたと願って編んだものである。

イギリスの長い歴史において創作された数多くの優れた文学作品を網羅して論じるのは至難の業である。本書はイギリス文学の全貌を概説するため文学史の体裁を採っているが、一般に論じられる編年の区切りや文学史観にはあえてこだわらなかった。学生諸君がイギリス文学の特色・要点を理解し、实例に即してその真髄を把握するように、各時代の特色と代表的作家、主要作品を精選して簡潔に記述した。断片的ではあるが、引用した作品を熟読・鑑賞して理解を深められたい。

本書を編むに当って、著者の先学、畏友である斎藤勇氏に監修を仰いだ。氏は本書の編成の総合的指導ばかりでなく、資料の検討、記述の適否にいたるまで詳細な校訂をくわえていただいた。記して万謝を捧げたい。ただし、本書に誤りがあれば、それはあくまで著者の責任であり、遺漏の点はご指摘、ご指導を賜われれば幸いである。本書の企画から出版に至るまで英宝社編集部の方々に多大の援助をいただいた。あわせて感謝の意を表したい。

1993年8月

著 者

凡 例

1. 作者の生没年，作品の製作年は主として Margaret Drabble ed., *The Oxford Companion to English Literature* (Oxford: Oxford University Press, 1985), Fifth Edition または Michael Stapleton ed., *The Cambridge Guide to English Literature* (Cambridge: Cambridge University Press, 1983) に準拠した。
2. 作者名，作品名の記述も上記の文学辞典に従ったが，本題だけで一般に熟知されている作品は副題の記述を省略した。
3. 演劇作品について（上演）と記している場合は初演の年，または上演の知られる最も古い年を表し，それ以外は作品が発表された年を示す。
4. 引用作品はその出典の表記を省略したが，それぞれの原典については多数の版を比較・検討し，できる限り適正を期した。
5. 原則として「詩集」はイタリック体で表記し，個々の「詩」は single quotation mark (‘ ’) を付してローマン体で表記した。
6. ラテン語などで表記されたイギリス文学作品は原則として英語の翻訳題名を併記し，イギリス文学以外の作品は日本語の翻訳題名を付した。
7. 末尾の年表では本文中に言及した作品か，最も代表的な作品に限って記載し，その他の作品を省略した。
8. 件名索引は本文中の記述と異なるものもあるが，整理の都合上，英語表記を優先した。

目 次

第一章 イギリスの黎明期	9
1. 民族の形成	9
2. Old English	10
3. キリスト教の布教	11
4. アングロ・サクソン文学	12
(1) <i>Beowulf</i> . . . 14 / (2) その他の主な作家と作品 . . . 15	
第二章 イギリス文学の誕生	18
1. Norman Conquest	18
2. Middle English	19
3. イギリス文学の新生	20
(1) William Langland . . . 20 / (2) Geoffrey Chaucer . . . 23 /	
(3) Thomas Malory . . . 28 / (4) <i>Pearl</i> の詩人 . . . 30 /	
(5) その他の主な作家と作品 . . . 31	
4. イギリス演劇のルーツ	33
第三章 ルネッサンス文学の開花	36
1. 新しい君主政治の時代	36
2. Modern Englishへの推移	37
3. Renaissance	38
4. イギリス・ルネッサンス文学	40
(1) Thomas More . . . 41 / (2) Edmund Spenser . . . 43 /	
(3) Christopher Marlowe . . . 45	

5. William Shakespeare	47
6. その他の主な作家	56
第四章 政治と宗教の激動期	61
1. Tudor 王朝から Stuart 王朝へ	61
(1) Ben Jonson . . . 62 / (2) Francis Bacon . . . 64 /	
(3) John Donne . . . 65	
2. <i>The Authorized Version of the English Bible</i>	68
(1) <i>THE OLD TESTAMENT</i> . . . 69 / (2) <i>THE NEW</i>	
<i>TESTAMENT</i> . . . 70	
3. Puritan 革命と王政復古	72
(1) John Milton . . . 72 / (2) John Bunyan . . . 76 /	
(3) その他の主な作家と作品 . . . 78	
第五章 知性と秩序の文学	83
1. 名誉革命の前後	83
2. Classicism とその流れ	84
(1) John Dryden . . . 84 / (2) Alexander Pope . . . 87 /	
(3) Samuel Johnson . . . 90 / (4) その他の主な作家と作品 . . . 92	
第六章 近代市民社会の文学	98
1. 近代市民社会の発展	98
2. Journalism の発展	99
(1) Joseph Addison と Richard Steele . . . 100 / (2) Daniel	
Defoe . . . 102 / (3) Jonathan Swift . . . 105	
3. 近代小説の誕生	108
(1) Samuel Richardson . . . 108 / (2) Henry Fielding . . . 111 /	
(3) その他の主な作家と作品 . . . 113	

第七章 激動と情熱の時代	118
1. 激動する政治と社会	118
2. Romanticism とその奔流	119
(1) Thomas Gray . . . 120 / (2) Robert Burns . . . 122 /	
(3) William Blake . . . 124 / (4) William Wordsworth . . . 126 /	
(5) Samuel Taylor Coleridge . . . 129 / (6) George Gordon Byron	
. . . 132 / (7) Percy Bysshe Shelley . . . 135 / (8) John Keats	
. . . 138 / (9) その他の主な作家と作品 . . . 141	
第八章 新しい女性の文学活動	144
1. 近代社会と女性	144
(1) Jane Austen . . . 145 / (2) Brontë 姉妹 . . . 147 / (3) George	
Eliot . . . 153 / (4) Christina Georgina Rossetti . . . 156	
2. その他の主な作家と作品	158
第九章 批評文学の隆盛	162
1. Criticism の発展	162
(1) Charles Lamb . . . 163 / (2) Thomas Carlyle . . . 165 /	
(3) Matthew Arnold . . . 168	
2. その他の主な批評家と作品	170
第十章 繁栄と退廃の時代	174
1. Victoria 時代	174
2. 瞑想と独白の詩人たち	175
(1) Alfred Tennyson . . . 175 / (2) Robert Browning . . . 177	
3. 写実文学の発達	179
(1) Charles Dickens . . . 180 / (2) William Makepeace Thackeray	

... 184 / (3) Thomas Hardy ... 186	
4. 世紀末文学	189
(1) Dante Gabriel Rossetti ... 190 / (2) Oscar Wilde ... 192	
5. その他の主な作家と作品	194
第十一章 現代文学の道程	200
1. 現代世界の混迷	200
2. 現代詩の開花	201
(1) William Butler Yeats ... 202 / (2) T. S. Eliot ... 203 /	
(3) その他の主な詩人とその作品 ... 206	
3. 現代詩壇の概観	207
4. 現代小説の歩み	209
(1) Willima Somerset Maugham ... 210 / (2) D. H. Lawrence ... 212 /	
(3) その他の主な作家と作品 ... 215	
5. 「意識の流れ」	219
(1) James Joyce ... 220 / (2) Virginia Woolf ... 222	
6. 現代小説の概観	224
7. 現代演劇の開幕	229
(1) George Bernard Shaw ... 230 / (2) John Millington Synge	232
8. 現代劇壇の概観	234
9. 現代批評の展開	236
10. 現代批評の概観	239
年 表	245
索 引	253
イギリスの文学地図	270

第一章

イギリスの黎明期

1. 民族の形成



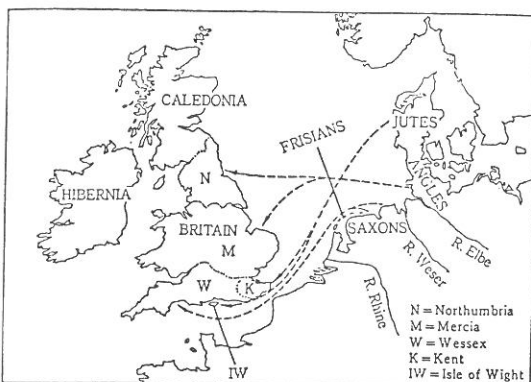
England・Wiltshire 州の Salisbury 平原にある Stonehenge

紀元前 3000–2000 年頃の新石器時代に、地中海沿岸地方からブリテン島の南西部に移住してきた民族がいた。その後の初期青銅器時代には、ヨーロッパ大陸からブリテン島の東部一帯と南部に来て定住した民族があり、Stonehenge¹などの巨石文化や古墳・土塁などの遺跡を残した。

しかし、この島に住みついた民族のうちで、現在その言語や文化についてわかっているのはケルト族 (Celts) が最初である。ケルト族はもともとヨーロッパの西部地域に広く住んでいたが、紀元前 6–7 世紀頃、この島やアイルランド島に移住して来て、その地に新しい社会を形成した民族であった。

紀元前 55 年、Caesar の率いるローマ帝国の軍団がブリテン島の侵攻を始め、紀元後の 50 年頃からこの領域をローマ帝国の属州として、Britannia と呼んだ。島内各地に軍事拠点を設け、London を中心に都市を結ぶ街道を建設した。2 世紀の初めには北方のピクト人 (Picts) やスコット人 (Scots) の侵入を防ぐため、Hadrian 皇帝 (76–138) の命によって長い城壁が築かれた。Hadrian's Wall と呼ばれ、現在もその遺跡が残っている。410 年にローマ帝国は軍隊を撤退させ、350 年余に及ぶ Britannia 支配に終止符を打った。

4世紀後半から始まったゲルマン民族の大移動で、北海に臨むエルベ河 (Die Elbe) 周辺やデンマーク南部に住んでいたアングル人 (Angles) とサクソン人 (Saxons) が、449年にブリテン島の東部海岸に上陸し、アングル人は Northumbria と East Anglia 地方を、サクソン人は Essex から



Anglo-Saxon 人, Jute 人の移住

から Wessex 地方を占拠した。さらに低地ライン地方からジュート人 (Jutes) が南部の Kent や Sussex 地方に移住して、ブリトン人を Wales 地方へ追いやった。その中でもアングル人の勢力が最も強かったので、この島を「アングル人の土地」(Angle-land=England)と呼んだ。彼らは多くの小王国を築いたが、6世紀末までには七王国になった。Arthur 王伝説はこの時代に武勇を馳せたブリトン人の王と騎士の物語から生まれたものである。

8世紀末から北欧のデーン人 (Danes) が England を、ノルウエー人 (Norwegians) が Ireland と Scotland を襲って略奪を繰り返した。England の王 Alfred the Great (849-99) がデーン人の襲撃と戦って Wessex を護り、占領された London を奪還するなど善戦したことはよく知られている。1016年にデーン人の Canute ([OE]Cnut, 995-1035) が England の王位についた。デーン人の一部は北部フランスのノルマンディ地方を占拠し、王国を築いた。彼らはノルマン人 (Normans) と呼ばれ、後にブリテン島を征服することになる。

2. Old English

イギリスの文学は中世紀の一時期にはアングロ・ノルマン語 (Anglo-Norman, Norman-French ともいう) というフランス語の一方言やラテン語で記されたこともあったが、原則的には英語で書かれたものをいう。その英語の歴

史は音韻や文法上の変化によって次の三つに区分される。

- (i) 古期英語 (Old English) -1150
- (ii) 中期英語 (Middle English) 1150-1500
- (iii) 近代英語 (Modern English) 1500-

英語の原型はアングロ・サクソン人の言語であった。ケルト人の言語や文化は Ireland や Wales 地方に伝承されているが、英語には僅かの語彙を残しているに過ぎない。ローマ帝国の支配時代にはラテン語が公用語として使用されていたが、撤退後はその使用もなくなり、土地・建物などに関連する語彙を残しただけで、ラテン語文化が英語に影響を与えたのは、後にキリスト教の布教が始まってからであった。

新しくブリテン島を占拠したアングル人やサクソン人、ジュート人は彼らの住んでいた地方の低地西ゲルマン語を持って来た。大陸では彼らの言語はほとんど同じであったが、ブリテン島に移った後はそれぞれ独自の方言 (dialect) に分岐した。

北欧から侵略したデーン人は古期ノルド語 (Old Norse) を話していたが、彼らはアングロ・サクソン人と祖先が同じで、その言語もよく似ていた。英語は侵略された民族の言語であったが、征服者の Canute 王はアングロ・サクソンの文化や風習を尊重し、自らもキリスト教に改宗したほどであったから、英語が基本言語として存続した。ノルド語からは日常生活の基本語が多数導入されている。

《Old English の主な特徴》

- (i) 名詞、代名詞、形容詞の「性」、「数」、「格」に応じた語形変化や、動詞の活用・呼応などによって文法関係を表す屈折言語であった。
- (ii) 発音は方言によって異なったが、語尾屈折にしたがって音韻も変化するなど複雑であった。原則的には綴り字と一致し、強弱・抑揚の語調をともなった。

3. キリスト教の布教

ローマの支配とともにキリスト教がブリテン島に伝来したが、次にブリ

テン島を征服したアングロ・サクソン人は元来ゲルマン的な多神教民族で、キリスト教信仰は Wales や Ireland で守られていたに過ぎなかった。597年にローマ教皇 Gregory I に派遣された Augustine (604没) の伝道団は Kent に上陸し、Canterbury を中心に、Kent や East Anglia 地方で活発な布教活動を行なった。これより先の6世紀中頃に、Ireland から Columba (521-97) が Scotland に渡り、Iona に僧院を建てて布教を始めていたが、この北方から England に来た伝道者たちは Northumbria 地方で熱心に布教した。

イギリスにおけるキリスト教はこのローマ系とアイルランド系の布教が南北から入り混じってイギリス全土に深く根をおろすことにな

ったが、ローマ系は教会の中央集権的行政体制や聖職者の階級制度などを重視したのに対して、アイルランド系は修道院形式の禁欲的信仰生活を尊重するものであった。二派は664年に Yorkshire の Whitby で宗教会議を開催し、合同してローマ・カトリック教会の組織に組み込まれることになった。イギリスの教会は各地に司教座を持つ大聖堂 (cathedral) を建設し、行政組織を整備して、やがて行政権と司法権を兼ね備えた教会勢力を確立するに至った。



キリスト教の布教 (十字架の一部は Ruthwell 教会に保存されている)

4. アングロ・サクソン文学

Old English で書かれた文学を「アングロ・サクソン文学」と呼ぶが、その最